

保健体育科教育実習生の「授業における知識」の特徴と 変容に関する事例研究

—協議会での発言に表出する「授業における知識」に着目して—

濱本 想子 (広島大学大学院)

1. 目的

本研究では、教育実習の協議会での発言に表出する保健体育科教育実習生の「授業における知識」について、その特徴と変容の要因を調査し、教育実習生の成長過程について検討することを目的とした。

2. 方法

対象者は、教員養成系 X 大学の健康スポーツ系コースの教育実習生 8 名 (実習生 A~H) と、実習校の中堅教師 K (教職歴 6 年)、初任教师 H (X 大学大学院博士課程前期 2 年生、非常勤講師歴 2 年) であった。実習生 A~H は、約 4 週間の教育実習において、全員で計 28 回の授業を行い、その全ての授業後に協議会を行った。なお、協議会での発言を全てボイスレコーダーに録音し文字化した。

分析方法としては、先行研究 (Shulman, 1987; 吉崎, 1987; Siedentop, 2000) をもとに筆者が作成した体育の「授業における知識」カテゴリーに沿って、協議会での発言を分類した。なお、この体育の「授業における知識」カテゴリーは 7 領域 (1/2/3/A/B/C/D) と 28 の下位カテゴリーで構成された。

3. 結果及び考察

(1) 実習生の体育の「授業における知識」の特徴

教育実習の協議会で表出する実習生の「授業における知識」は、以下の 4 つの段階を経て変容することが示唆された。第 1 段階は「教授方法についての知識」(領域 2)。第 2 段階は「教材内容と教授方法についての知識」(領域 A) のうち特に「説明・指示・概念の表現・発問」カテゴリー。第 3 段階では「教材内容と生徒についての知識」(領域 B)。そして、第 4 段階は最も高次な知識領域の「教材内容、教授方法、生徒についての知識」(領域 D) であった。しかし、本研究の結果から、「教材内容、教授方法、生徒についての知識」(領域 D) に関しては、課題として表出する機会が多く、実習期間中に知識として定着したとは断言できなかった。それでも、実習生は、教育実習を通し、4 つの段階を踏んで、領域 D に関する知識に焦点が向くよう

になることが推察された。

(2) 実習生の成長の要因：実習生 F を事例として

実習生 F は、「教材内容と教授方法についての知識」のうち、「説明」に関する課題が最も顕著に現れた実習生であった。しかし、教育実習を通して、協議会での発言に変容が見られ、先の課題に対する授業実践での改善が観察された。そこで、実習生 F の教育実習期間における成長を事例として取り上げた。

とりわけ、実習生 F の協議会で表出する「授業における知識」の変容には、次の 3 つの要因が大きく影響した。①課題に焦点化した他者との協議会及び授業実践のサイクル。②協議会における他の実習生の具体的なアドバイス。③メンターである中堅教師 K による「生徒についての知識」(領域 3) の視点を含めた具体的なアドバイスと改善策の提示である。これら要因が相互に関係して成長が促進されたと考えられる。

4. 結論

本研究では、教育実習の協議会での発言に表出する「授業における知識」には、以下の特徴及び変容の要因があることが明らかとなった。①教育実習前半はマネジメントといった単一的な知識に関する発言が多い。しかし、後半になるにつれて、子どものつまずきへの対応に関わる複合的な知識に関する発言が増えるという特徴が示唆された。②実習生の成長には、各々の課題に焦点化した他者との協議会や、メンター教師の子どもについての知識を交えた具体的なアドバイスなどが効果的であったことが推察された。

最後に、本研究で用いた体育の「授業における知識」カテゴリーを協議会で具体的な指標として用いることで、事象を客観視でき、課題に焦点化した建設的な協議を行う手立てとなる可能性が考えられた。一方、上記のカテゴリーを一般化させることが課題である。

〈主な参考文献〉

・吉崎静夫 (1987) 授業研究と教師教育 (1) -教師の知識研究を媒介として-。教育方法学研究, 13: 11-17.